

平成 30 年 3 月 22 日

## 平成 29 年度国立大学図書館協会海外派遣事業参加報告書

神戸大学附属図書館情報サービス課海事科学情報サービス係  
谷口由佳

このたび、平成 29 年度国立大学図書館協会海外派遣事業により、アメリカの図書館を訪問し調査研究を行ったことを以下の通り報告する。

### 1. 訪問期間

平成 29 年 9 月 17 日（日）～10 月 1 日（日）

### 2. 訪問先 / 担当者

University of Central Florida (UCF), John C. Hitt Library / Barbara Tierney

\*この他、ご厚意により Harriet F. Ginsburg Health Sciences Library、Curriculum Materials Center も見学した。

### 3. 調査研究内容

「北米の大学図書館におけるアウトリーチサービスの実態調査」として、University of Central Florida Libraries (UCF Libraries)における学習・教育・研究支援について John C. Hitt Library のライブラリアンへの聞き取り調査および実際の業務見学を行った。

### 4. 調査研究の結果

UCF は学生数が約 66,000 名、教職員数が約 12,000 名と、アメリカにおいても大規模な総合大学である。UCF Libraries における「アウトリーチサービス」はサブジェクトライブラリアンが担当し、「ライブラリアンが建物を出て直に教育・研究の現場でサービスすること」と定義していた。

「建物を出て」と言ってもオフィスを図書館外の学部棟などに構えるライブラリアンはごく一部で、オンラインリソースによる支援もアウトリーチサービスの一つと位置付けている。物理的な活動拠点の移動よりも利用者の活動に対して統合を図る能動的な姿勢 (Reactive to Proactive) を指して「アウトリーチ」と称しているとのことであった。

アウトリーチサービスを担うサブジェクトライブラリアンの職責は職位記述書と年間の評価指標を兼ねた「Annual Assignment and Position Description (AAPD)」という書類に記されており、具体的には担当する主題分野における教員会議への出席、教員・学生との個別

相談、ワークショップ、eニュースレター・オンラインリサーチガイド作成、機関リポジトリ(STARS)の広報、学術コミュニケーション支援などが列挙されている。個別相談としては他にも Academic department representative (図書館との連携のために Department の事務長から指名された教員) と協働して蔵書構築を行ったり、Faculty undergraduate / graduate coordinator (全ての学部生 / 院生のカリキュラム・講義をコーディネートする教員) に図書館のインストラクションが学部生のカリキュラムに確実に組み込まれるよう働きかけたりしている。

Department ごとに定められるカリキュラムが国および地域の認証機関の基準を満たすかチェックする際に、サブジェクトライブラリアンが「そのカリキュラムにおいて有用な図書館の情報資源およびサービス」を分析した報告書が参照される。また、ライブラリアン(Library faculty)と教員(Academic faculty)とが大学の基幹部分を構成するほとんどのワーキンググループで協働していて、これはアメリカの大学に広く見られる傾向であるようだ。そのため、図書館が大学の中で一定の地位を占め、カリキュラムを把握しやすい環境にある。

その前提の下で、さらにライブラリアンが情報リテラシーモジュールや主題分野に沿ったオンラインリサーチガイドを作成して講義での利用に供し、実際に教員に促されて単位取得に利用する学生が多いとのことであった。情報リテラシーモジュールは APA、MLA などにおける引用・剽窃防止のような「形式を守る」内容だけでなく、リテラチャーレビューやウェブサイト評価のような「批判的に情報源を評価する」ことも含んでおり、この部分の教育が日本では弱いのではないかと省みさせられた。

毎年約 80%の学生がオンラインまたはブレンディッドコース(オンライン・オフライン混合型の講義形態)を受講していることもあり、リサーチガイドを始めとしてサービス紹介動画など豊富なオンラインコンテンツをウェブサイトで提供している。学習・教育支援だけでなく教員に向けた引用管理ソフトウェアや著作権の説明においても同じ方法が取られ、UCF のサブジェクトライブラリアンはオンラインに「埋め込まれている」エンベディッドライブラリアンも自称していた。

対面でのワークショップやインストラクションも頻繁に開催され、現地では院生の個別相談と学部生向けのワークショップを見学させていただいた。いずれもまず学生が抱える課題や疑問を引き出し、その疑問をどの情報資源をどう用いて解決するかという視点からサービス紹介に繋げていたことが印象的で、ニーズから出発する方法が奏功してか学生の集中力も高かった。

その他にレファレンスカウンターでの業務や Ask a Librarian (フロリダ州の図書館が連携して提供するレファレンスサービス) のチャットレファレンスも見せていただいたが、総じて利用者がライブラリアンに質問することに躊躇いがなく、質問のほとんどが館内の案内や基本的な資料検索など簡単なものであった。利用者から専門的なサポートを求められ

るにはライブラリアンが専門的知識を有するだけでなく、日常的に信頼関係を培っていることも重要であると伺えた。アメリカの大学図書館によく見られる、図書館サービスと担当者自身の一体となった広報もその一助となっている様子であった。

研究支援としては、まず学術コミュニケーション支援グループの取り組みが挙げられる。このグループは研究ライフサイクルにおける図書館の 8 つの役割（文献レビュー、引用管理ツール、メタデータサービスなど）を定め、どの過程でどのようにライブラリアンが助けられるかウェブサイトで図式化して案内し、各テーマに沿ったオンラインリサーチガイドやワークショップ、ウェビナーを提供している。サブジェクトライブラリアンが担当分野に沿って作成した e ニュースレターや情報源・サービス・イベントなどを紹介するメールも定期的に送られ、博士研究員や研究助手も含めて専門に特化した情報が提供される。

また、図書館が開催するワークショップは文献レビューや引用ツール、著作権などに関するものも多いが、特に教員からの要望の声が高いのは出版社・データベース提供元の製品説明で、ライブラリアンがデータベースの利用を実演したり、教員が講義や課題におけるデータベースの使用例を紹介したりすることもあるらしい。

学内他組織とも様々な形で連携を図っている。たとえば UCF における学生へのライティング指導は、University Writing Center (UWC) が主導してライブラリアンがリサーチスキルや情報リテラシースキルを教えるという協力体制で行われている。

学士課程学生による研究をサポートする Office of Undergraduate Research (OUR) は講義におけるハイインパクトプラクティス（能動的・集団的な実践学習）などの手法を教員に勧めており、OUR に招かれたライブラリアンも教員に講義の再設計や学生に課す課題の見直しを手伝うことを申し出ている。そこからオンラインリサーチガイドやインストラクションを介して講義に関わっていくとのことである。

Student Development and Enrollment Services (SDS) は健康面、経済面、法律面など学生生活全般のサポートをする組織の集合で、障害学生サービス、編入学生サービス、初年次教育など多くのユニットに、図書館とのリエゾンを担う「エンゲージドライブラリアン」としてサブジェクトライブラリアンが割り当てられているようだ。

ライブラリアンの評価は前述の AAPD の項目の具体的な達成度・達成状況に基づいてなされるが、図書館全体の評価に当たっては大学における RoI（投資対効果）が重んじられ、2014 年からの研究では図書館サービスを利用する学生の成績(GPA)に対する貢献度が数値的な指標とされている。

これは「学生の成功に責任を持つ」という大学全体の方針にも沿うもので、図書館サービスのユーザーはノンユーザーに比べて高い成績を収めることが実証されている。